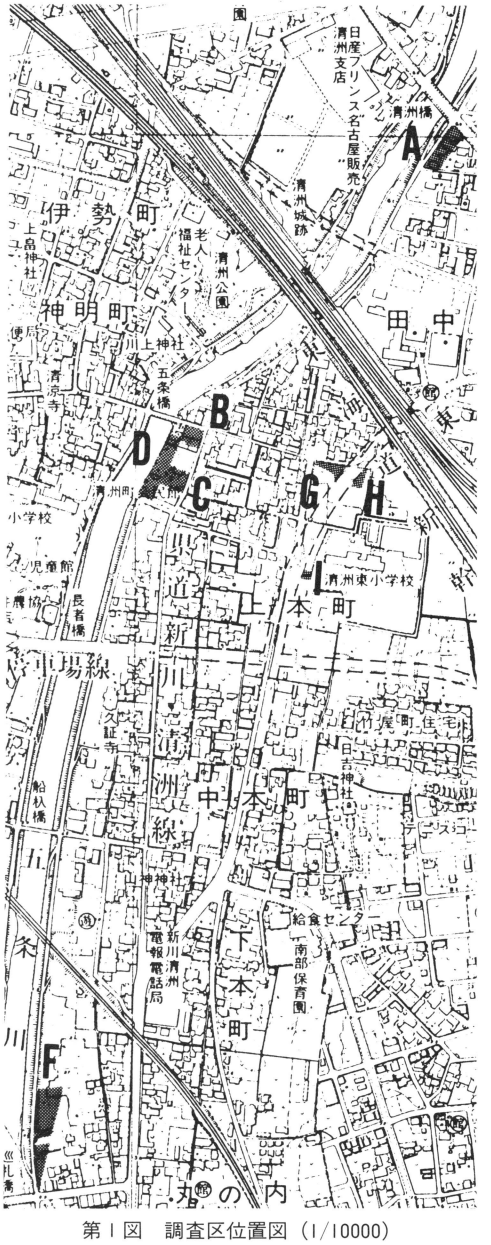
清洲城下町遺跡

調査の概要

清洲城下町遺跡は濃尾平野の中央部を南流する五条川中流域の自然堤防帯に展開する古代から近世にかけての遺跡である。



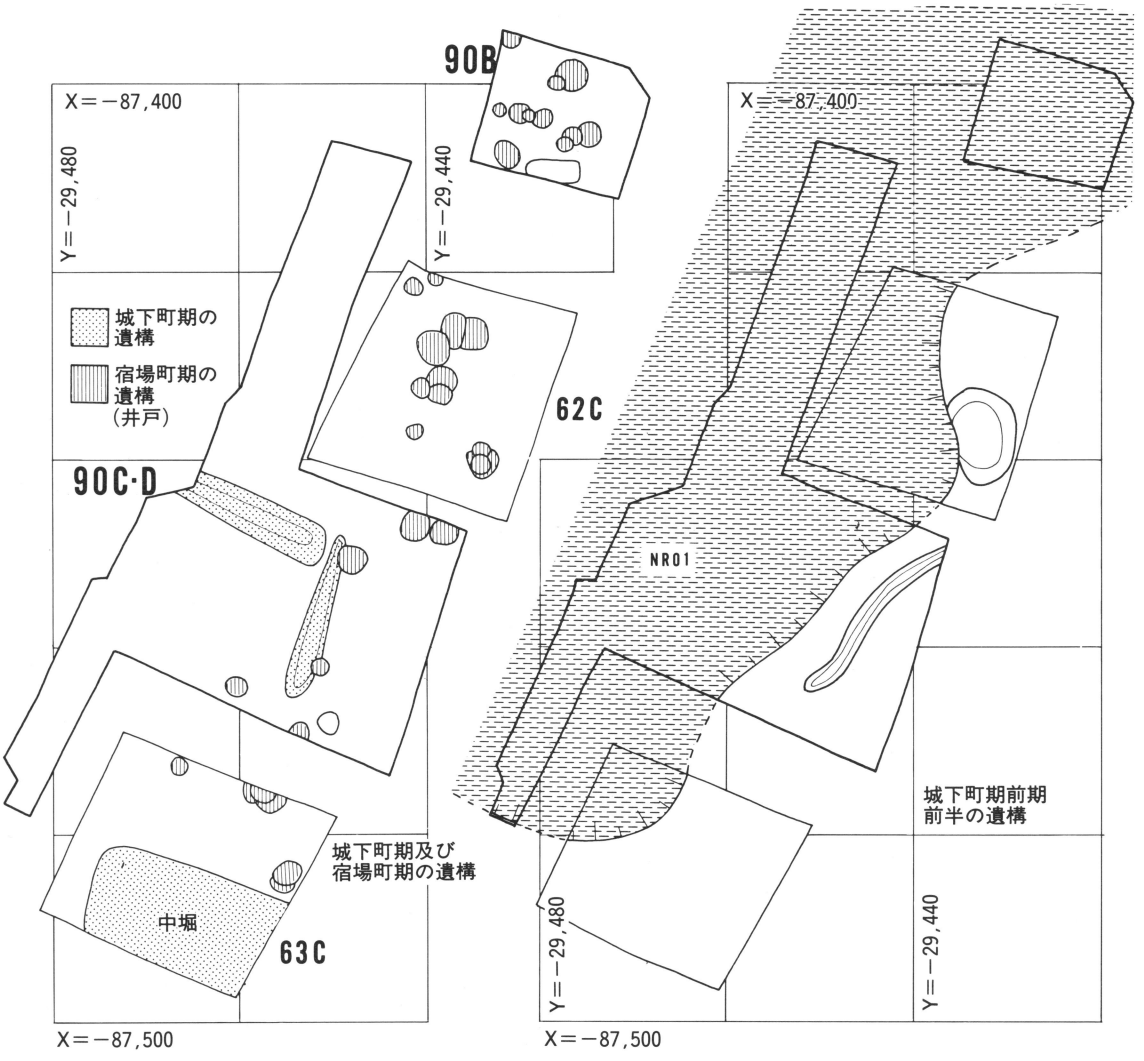
第１図　調査区位置図（1/10000）

発掘調査は昭和56年度に名古屋環状２号線にともなう事前調査が開始されて以来、毎年、五条川改修関連調査、県道清洲新川線関連調査などが継続して実施されている。今年度は五条川改修関連調査（Ａ～Ｆ）5,600㎡、県道新川清洲線関連調査（Ｇ）180㎡、県道清洲新川線関連調査（Ｈ・Ｉ）210㎡、合計5,990㎡を実施した。

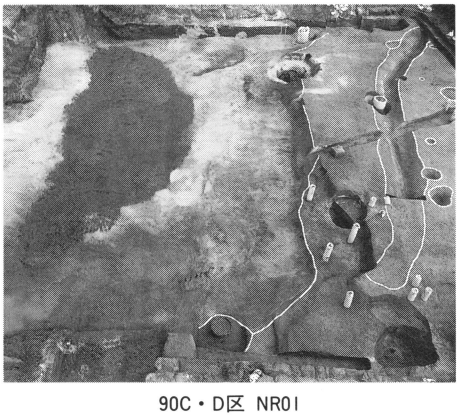
なかでも五条川改修関連調査は昭和61年度に調査が開始されてからすでに５年の年月が経過し、調査面積は全体で２万㎡以上に達している。今年度はいよいよ現堤防下の調査に入り、旧五条川と美濃街道の関係などが注目された。調査は渇水期を待って９月より実施したが、今年度は異常気象のため台風が３回も直撃すると言う事態がおき、作業は難航した。しかし、結果としては旧五条川（支流も含めて）の跡とその流れの一端がせき止められてできた「河跡沼」を確認することができた。「河跡沼」からは人骨や漆器など多様な遺物が紀年銘木簡とともに出土し、当時の生活を復元するのに貴重な資料をえた。

県道清洲新川、新川清洲線の調査では当初の予想どおり古墳時代から平安時代の竪穴住居など古代の遺構を確認することができた。

（城ヶ谷和広）



第２図　90B・C・D区遺構実測図（S＝1/800）



90C・D区 NR01

90A区　SE05井戸枠検出状況

調査の概要

五条川河川改修関連

今年度の調査はA区とB・C・D区が非常に距離が離れており、様相がずいぶん異なっていたので、それぞれ調査区ごとに概要を記述することとする。

A区　ここでは、奈良・平安時代、中世、城下町期の3時期の遺構、遺物を確認した。奈良、平安時代では、竪穴住居2棟を確認した。ここからは、K－14窯式の灰釉陶器が出土した。この時期の遺構、遺物はこれまで確認されておらず、当該期の集落の存在を示唆させる資料となる。

中世では、井戸2基、溝2条、ピット群を確認した。SE05は、井戸枠の上段に横板3枚をセットにして方形に組み合わせ、その下には竹材を隙間無く方形に並べたものである。また、井戸の最下層からは、12世紀後半から13世紀前半に位置付けられる椀と底部外面に墨書を施した皿がセットになって出土した。どちらも使用された痕跡は認められず、廃絶儀礼に用いられたものと考えられる。

城下町期では、前期に比定できる屋敷を囲むと考えられる溝2条、井戸3基を確認した。

B・C・D区　ここでは、城下町期と宿場町期の遺構、遺物を検出した。

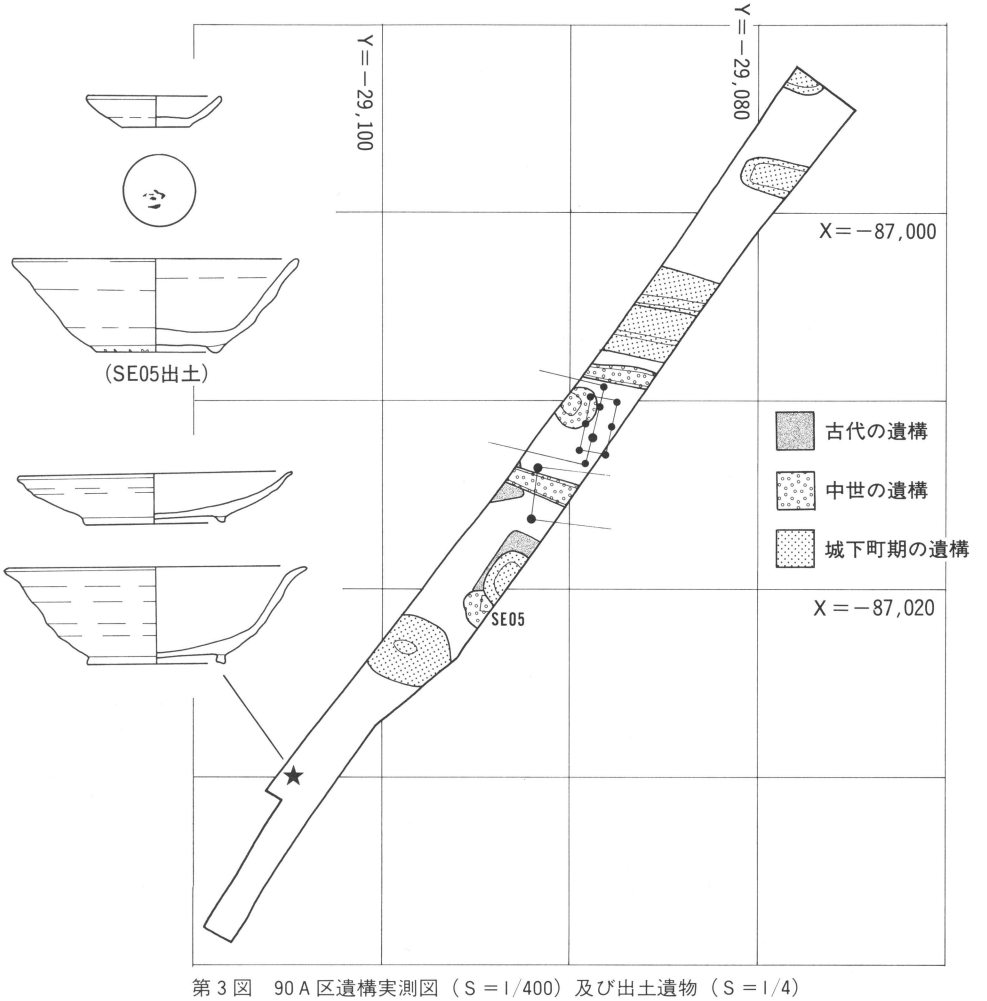
城下町期については、これまで前期は、守護所が下津から清須に移った1478年から1586年の天正地震、その後の織田信雄の大改修までを総称していたが、今回の調査区、ことにD区で、前期をさらに2期に細分し得る状況が確認された。前半は、今年の調査地点では五条川の流路とその澱み（NR01）の時期で、他に流路に平行して走る溝1条を検出した。澱みの部分からは、永正五（1508）年の紀年銘の卒塔婆が出土しており、また、陶磁器の年代からも16世紀前半に位置付けられよう。後半は、天正地震直前の16世紀後半に位置付けられ、C・D区で溝2条を確認した。そこでは天正地震直前に五条川が埋まったそのままの状態のところを造成しようとした状況が確認できた。それは、急な造成であったためか地盤が非常に不安定で、天正地震の際に多量の砂が吹きだし、地表面が沈下して砂に覆われた状況を確認した。砂を取り払った後の当時の面では多くの人の足跡を検出した。遺構も非常に希薄である事から、何か急な理由があって町を作ろうとし、地震によって壊された状況が想定できる。

宿場町期については、調査区の位置がちょうど美濃街道のすぐ裏手という事もあって、B区を中心に町屋の裏側に展開する井戸群を検出した。B区の井戸群はほぼ5群に分かれており、何度も掘り直した状況が確認できる。時期は19世紀前半頃に位置付けられる。

ＮＲ01出土の木製品について

ここでは、永正五（1508）年銘の資料と共に、16世紀前半に比定できるＮＲ01の澱みからまとまって出土した木製品について紹介する（図４、図５）。これらの木製品は、紀年銘資料と同一の灰黒色粘質土中から出土した。木製品には、椀、皿、箸、下駄、卒塔婆、柿経などがあり、その量は非常に多く、まだ整理作業が済んでいないので、ここではその一部を紹介するにとどめる。

卒塔婆類は、大きさにより３種類に分かれる（第４図）。そのうち、小型のものは、鴿という文字をいれた卒塔婆が何枚も出土した。これは、片面の文言の内容から２種類に分けられる。一つは、南無阿弥陀佛為雲窓慶大姉也（５、６）、もう一つは、南無阿弥陀佛為定因也（３、４）である。もう片面は鴿と日付が記されている。１は永正五年銘の板塔婆である。上部は欠損している。片面は、□陀佛　賢阿弥陀佛往生位、もう片面は、□□陀佛

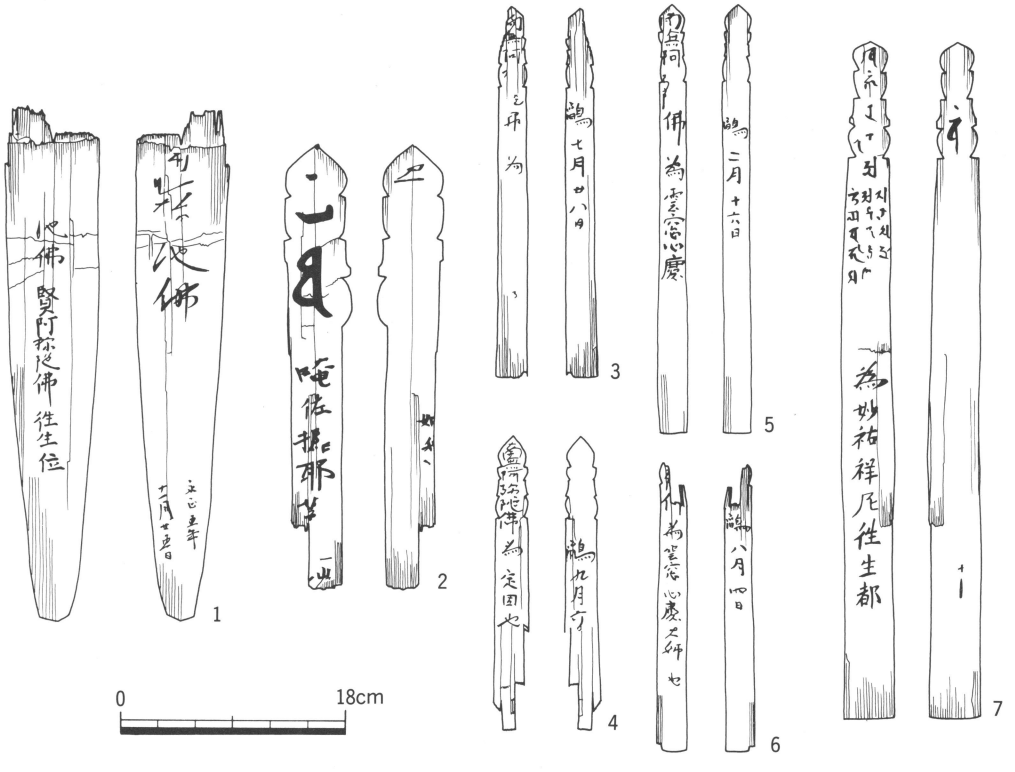


第３図　90Ａ区遺構実測図（Ｓ＝1/400）及び出土遺物（Ｓ＝1/4）

永正五年十一月廿五日と記されている。2は卒塔婆の上半分である。片面は、文珠菩薩を表す梵字、俺佐□耶□と記されている。7は中型品である。五輪部分は梵字で空、風、火、水、地を表し、さらにその下に梵字を記し（経文か）、その下は、為妙祐祥尼往生都（率望也）と読める。裏面は大日如来を表す梵字が、さらにその下に十月十四日と記されている。

木製品類も多く出土した（第5図）。3は白木椀である。白木椀はこれまで清須で出土しておらず特殊な使用法が推定できよう。漆製品も、皿、椀（1、2、4～7）が出土しており、椀はその大きさの差から、2～3種類に分類できよう。8は木の板の中央に竹材を差し込んだものである。竹の縁には煤が着いており、大きさから、線香立てではないかと思われる。下駄は一木作りのものと、差歯下駄の2種類を検出した。12は表面に焼き印で花と思われる文様を施している。

さらに、これらの木製品と共に人、鹿、犬、猪、馬などの骨が出土した。これらの骨は埋葬されたそのままの状態のものと、後で手を加えたものとが存在する。この状況からこの場所が河原での特殊な空間を推定させる資料である。　（加藤とよ江）



第4図　90D区NR01　出土木製品(1)

第５図　90D区NR01　出土木製品(2)

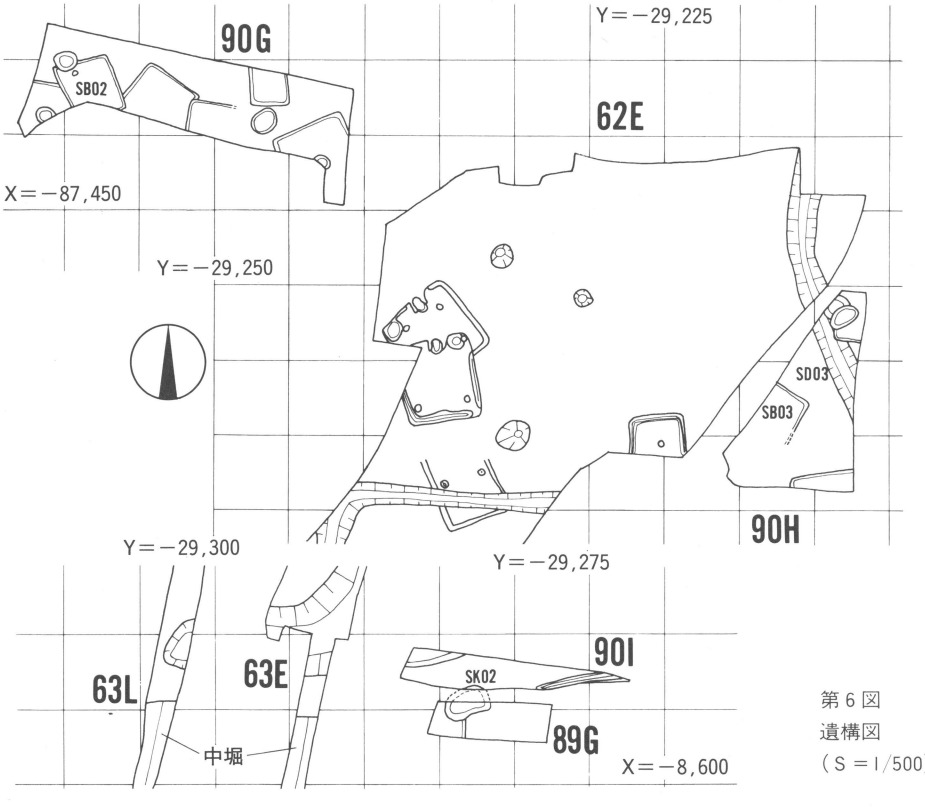
県道新川・清洲線関連

本年度はG・H・I区の調査を実施した。以下に概要を示す。

G区　奈良時代の竪穴住居6棟と土坑が数基検出された。竪穴住居は一辺が5m前後を測る隅丸方形を呈し、周溝は検出できなかった。出土遺物はSB02から8世紀後半の杯が出土した他は、あまり良好な遺物は見られない。表土および江戸時代の土坑から7世紀から8世紀の須恵器が出土することから、これらの竪穴住居の時期がおおよそ伺える。なお、若干の遺物はあるものの、清須城下町に関連する遺構は存在しなかった。

H区　古墳時代後期の溝と平安時代の土坑などが検出された。古墳時代後期の溝は、62年度に調査したSD03（62E区SD07）に繋がるもので、該期の集落の限りを示すものであろう。また、SB03から弥生時代中期の甕が出土し、従来遺物のみを確認していた弥生時代の遺構の存在も想定できよう。ただ、G区と同様、清須城下町の遺構はなかった。

I区　昨年度調査した隣接する89G区と合わせて報告したい。清須城の中堀の内側に隣接する地点で、中堀に平行する溝1条と16世紀代の滞水状況を示した土坑が検出された。土坑の中からは、法華経を書写した柿経が数百枚程出土しており、その性格が問題である。この他には7世紀の土坑、8世紀の竪穴住居が存在し、該期の遺物が散見している。



第6図
遺構図
（S＝1/500）

まとめ

平成２年度の調査では、古代から近世までの各時期の遺構・遺物を得たが、従来と同様、調査地点によって遺跡の様相が異なっている。ここでは要点を時期ごとに整理する。

１、古代に関しては、これまで集落跡の存在が確認されていた田中町地区一帯で、７～８世紀代の竪穴住居が検出され、新たなデータが蓄積された。それに加え、今まで空白となっていたＫ－14窯式の段階の遺物と遺構が、これまで知られている集落跡よりも北に位置するＡ区で確認され、集落の連続性と人々の移動について今後問題となるであろう。

２、中世の段階では、Ａ区で井戸などを確認した。これは12～14世紀を中心とする朝日西遺跡の南端部の遺構と考えられ、朝日西の集落の広がりを表す資料である。

３、清須城下町に関連する大きな成果は、Ｂ・Ｃ・Ｄ区で旧五条川を検出したことと天正地震前後の中堀内部の状況を確認したことである。

旧五条川は現五条川よりやや東に広がり、Ｄ区南端で西に屈曲する形で検出できた。これは「清須村古城絵図」と合致し、屈曲点より南に自然堤防の微高地が展開していたと考えられる。旧五条川の脇に位置する澱みの黒灰色粘土からは永正五（1508）年の紀年銘資料が出土しており、共伴する土器・陶磁器・多種多様な木製品などは良好な一括資料となるだろう。また、この澱みには死後加えた刃傷が残存している人骨、馬・鹿・犬などの獣骨、卒塔婆、柿経なども投げ入れられており、河原に特殊な空間が広がっていたと推察できる。川に平行する溝が旧五条川の屈曲点で開口することとあわせて、その持つ意味は今後の課題である。

旧五条川を埋積した粘土の堆積は短期間に行われ、1586年の天正地震の噴砂によって覆われている。旧五条川埋積後、天正地震までの間は主な遺構は溝一条しか無く、地震直前に足跡が認められることから建造物などがなかったと考えられる。天正地震以降の段階にも遺物・遺構がほとんど存在せず、清須城下町中堀の虎口内部に相当する空間に軍事的な空白地があったことは注目に値する。

Ａ区で検出した前期の溝は屋敷地を囲む溝と推定でき、田中町地区の屋敷地群と同様のものである。この屋敷地群は一辺100ｍ規模の居館を取り囲む形で展開していただろう。

４、宿場町の時期の遺構は、18世紀末以降の井戸群が中心である。従来の知見と同様、現美濃街道に沿った形で、しかも幾つかの切り合い関係をもって検出された。今回は特に美濃街道が五条橋に向かって曲がる角地での調査を行い、その地点での遺構配置が問題であった。結果として、東西方向に走る現美濃街道に接近して井戸が発見され、現美濃街道の東西方向に面して短冊型地割を成していたとは考えにくい。なお、昨年度確認された瀬替え以前の宿場町に関する遺構は全く存在しなかった。　（鈴木正貴）